

私の個人主義

和田 俊

本学の秋の学園祭に、なにか話をしてほしいと学生から依頼された。

聞けば、相手は学生だけでなく、一般の方々も聴きにお出でになるといふ。さて、それではどんな主題が望ましいか。とつおいつ考えたすえ、夏目漱石先生のひそみにならって、「私の個人主義」と題することにした。

私自身のヨーロッパ滞在経験を下敷きにして、人間というものの捉え方をめぐり、文化の違いを話してみようと思ったのである。

われわれはとかく、個人主義を利己主義と混同しがちで、この言葉にはなんとなく負のイメージが付きまとう。その結果であろうか、利己主義を否定するあまり、なにかも一挙に飛び越えて国家に集約するような乱暴な議論が、しばしば罷り通るようである。

それも個人主義の希薄な社会的風土のゆえかと、かねがね懸念していたが、不景気のせい、世紀末のせい、このところ「新保守主義」とやらが流行りだしたようにもみえる。この風潮、決して好ましいものとは思われず、ここはもう一度漱石先生にご出馬願うべきではあるまいかと、ひそかに愚考した次第である。

とはいえ、秋の好日の学園祭のこと。学生たちにすれば、講演会などに出席して、教室の固い椅子に座っているよりも、外の広場でビールを飲んだり、たこ焼きを食ったりするほうが面白いに違いないから、私の演説を聴く若者の姿はあまり多くはなかった。

そこで、この「論叢」に、この時の話をかいつまんで記し、学生諸君の目の前に、いま一度披露してみようかと思う。同時に、これをもって「論叢」寄稿の責めを果たそうという心算でもある。

夏目漱石の「私の個人主義」という演説は、かなり名高いものだから、ご存じの方も多かろうと思う。学習院の同窓会に呼ばれて、行った講演で、一九一四年のことである。いまから八十五年前の話だ。

漱石はご承知のように、大学で英文学を学んだ。昔の人はどうやって勉強したのかよく分からないが、いまの学生よりもはるかに豊富に知識を詰め込んでいる。テレビも電話もない時代だから、暇を持て余して、本を読んでいたのかもしれないが、漱石の場合は、英人の先生にウォーズワースの詩を読まされたり、また作文を作らされては、冠詞が落ちているといって叱られたりしたという。しかし、三年間学んだにもかかわらず、英文学ばかりか、ついに文学そのものもわからずじまいだったと、漱石は告白している。彼の煩悶はまずここに根ざして、だんだんに深刻になっていったらしい。

自分の専攻に関して、こうしたあやふやな態度のまま、漱石は教師にさせられてしまった。語学のほうは怪しいにせよ、どうにかお茶を濁して、その日その日は過ごしていけたけれど、腹の中は常に空虚だったという。

まるで霧の中に閉じ込められているみたいで、どちらの方角を眺めても、ぼんやりしている。あたかも袋の中に詰められて、出ることのできない人のような気持ちだったそうだ。

とにかく、西洋人がよいといえば、自分の腑に落ちようが落ちまいが、その評を鵜呑みにして、無闇に触れ散らかす。よそよそしいものを、わが物顔にしゃべって歩く。「もともと借り着をして威張っているのだから、内心はよっぽど不安だった」のだ。

こうした不安を抱いて、漱石は松山、熊本、そしてロンドンと渡り歩くのだが、ついにある時、文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるよりほかに、自分を救う道はないのだと悟ったという。それまではまったくの他人本位で、浮草のようにふわふわと他人に頼っていたから、駄目であったということに、ここに至ってようやく気づいたというわけだ。

ロンドンに留学して、漱石はこの不安を吹っ切り、自分の立脚点を固めようと決意した。他人本位におさらばして、自己本位を確立する決意である。「私はこの自己本位という言葉を、自分の手に握ってから大変強くなりました」と、彼はいう。

漱石はこの四文字から、新たな出立をしたのである。自己本位とは、要するに自分自身の尺度を持つということであろう。「ああ、ここにおれの進むべき道がある。ようやく掘り当てた！　こういう感動詞を心の底から叫び出される時、あなた方は始めて心を安んずることができるでしょう」と、漱石は学生たちに語るのである。

そうして、漱石はこの自己本位の態度に、個人主義の根本があると主張するのだ。

また、自己本位の個人主義を認める以上、他人の自己本位も当然のこととして承認する義務があるわけで、ここに社会の根本原則が存立すると、彼は説く。

漱石はイギリス嫌いであったが、この個人主義という一点においては、かの国を尊敬せざるをえないと頭を下げる。「イギリスという国は大変自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、またイギリスほど秩序

の整った国はありません。自分の自由を愛するとともに、他の自由を尊敬するように、子供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから、彼らの自由の背後には、きっと義務という観念が伴っています」と語り、日本などとはこの点で、とうてい比較にならないと、兜を脱いでいるのだ。

たしかに、西欧社会とわが社会との大きな違いの一つは、この個人主義の強弱にあるように私も思う。

最近のわが国の金融不安の背景には、大蔵省を中心とする長年の護送船団方式があると、よく指摘される。「みんなで渡れば、怖くない」という、わが国民特有の心理で、左右をじっと見て、まわりと同じ行動をとろうというのだから、まさに漱石先生のいう他人本位である。

だが、日本人のこの行動様式は、ヨーロッパ人にはなかなか理解できない。

朝日新聞の特派員としてパリに滞在していたころ、セーヌ左岸の鴨料理の老舗「トゥール・ダルジャン」によく出掛けた。昭和天皇が訪欧のおり、ここで食事したことも手伝って、日本からの訪客をしばしば案内したからだ。そんなことで、店の主人とも仲良くなった。

「日本のお客さんに、たくさん来ていただいて、大変ありがたい」

主人はあるとき、こんなお世辞をさんざん振りまいたあと、

「ところで、和田さん、私にはよく分からないところがあるのですがね。というのも、日本のお方は大勢いらっしゃるのですが、どういうものか、みんな同じものを注文なさるのですね。これが、少々不思議で・・・」

と、私に尋ねてきた。

格式高い老舗料亭だから、日本人は普通独りでは来ない。五人、十人の団体でやって来るのだ。そして、たいいてい××商事、○○物産などの駐在員が、ガイド兼通訳で付き添っている。蝶ネクタイのボーイに、うやうやしく革表紙

のメニューを差し出されても、大方の日本人にはチンプンカンプンである。頃合いを見計らって、ガイド兼通訳が「おすすめはこれですが・・・」と、ある料理をしめすと、「私も、私も」と、全員右へ倣えとなることは、容易に想像される。

同じ駐在員がまた別の客を案内すると、「あの時、好評だったから、あれにしとけば間違いあるまい」とばかり、「おすすめは・・・」と同じ料理を注文することになるから、店からみると、五十人、百人の日本人が全員同じ料理をとるという魔阿不可思議な現象が出来る。「日本人の舌の構造は、どうなっているのか」と、「トゥール・ダルジャン」の主人が、首を傾げるのもむべなるかな。

しかし、ここにはひとつ、わが同胞のために弁明しておこうと、私は、

「いや、日本人というのは大変な気配りの民族ですからね。自分だけ違ったものを注文して、みんなと調子が合わなくなってしまうずいと思っ、つい一緒になってしまふのですよ」

と、申し開いたのだが、主人にはさっぱり通じない。

「ええっ、そんな心配をされているのですか。そんな気配りはまったく不要ですから、これからはお客さんにそうお伝え下さい」

という反応である。

レストランに入れば、「自分はこれ、あなたはなに・・・」と、わいわいがやがや、それぞれ自分の好みを主張して楽しむフランス人からみると、日本人の「みんな一緒」は理解できないわけだ。

実際、彼らの文化からすれば、日本風の「おまかせ料理」方式は受け入れがたいだろう。自分の頼まないものが、順々に出てきて、しかも料金をとられるとあっては、フランス人氣質と相いれないのだ。

自分は自分、他人は他人。そして、お互いに干渉しあわない。これが個人主義の大原則だとすれば、ヨーロッパ人のほうがわれわれよりも一歩も二歩も先をいつている。

商店などの客の扱い方にも、この文化の違いは現れている。日本の店は、店員一人で何人ものお客さんを同時にさばくのが普通だが、ヨーロッパの慣習はどうもこれと違うようだ。一人の店員がお客につくと、その客の用が全部すむまで、面倒をみるのが彼らの流儀である。

八百屋でも、肉屋でも、牛乳チーズ屋でも、あれこれ注文すると、店員がそれらをすべて取りまとめ料金の計算をし、客が会計係に支払うと、買った品を一括して渡してくれるというシステムである。

町の商店がこの通りだから、ブルジョワ的な老舗になれば、この店員とお客の対一主義はさらに徹底する。

ロンドンの中心部ピカデリーサーカスの近くに、セビルロウという街がある。この通りには、仕立ての洋服屋が軒をつらね、端から端までテイラーばかりである。日本語の背広の語源は、このセビルロウ（セビロー）にあるといわれるが、さもありなんと思わせる町並みである。

いずれもいちげんさん、お断りといった風情の店構えだが、私は新聞記者の野次馬根性を発揮して、そのなかのとある店に入ってみた。すると店の支配人格らしい立派な風采の男が近寄ってきて、

「こんにちは、よくいらっしました。御用をお聞きましたますが・・・とここでお客さまはどちらのご紹介で・・・」

と、イギリス風にのべつに「サー」を連発しながら、尋ねてきた。

「いや、実は日本大使閣下から、お店のことを聞いていたものですから・・・」

と、私がでたらめを並べると、さすがに葉がきいて、態度もいっそう慇懃になった。

「そうですか。日本大使館とは、吉田茂さん以来のお付き合いを願っています」

と、めっそももない応対である。

そこで、背広を一着と、こちらの意を通じると、

「では、どのような生地で・・・」

と、まず布見本をもってくる。

生地をきめると、今度はスタイルだ。

大きなスタイルブックを運んできて、あれこれと説明してくれる。

「よし、これにしましょう」と、三つ揃いを指定すると、

「ご指名の職人はいらっしゃいますか」

と、きた。

「いや、あなたに任せます」

というと、ちょっと考えるようなふりをして、階下から職人をよんできた。

「彼をあなた様の係にさせて下さい」

そのように「契約」を成立させてから、ようやく寸法とりだ。メジャーがすんだところで、ここはチップだなど、さすがの私も気づいて職人に心付けを渡す。

以上のごとく、一時間半にわたって、こんなやりとりを続け、さて「出来上がりは・・・」と尋ねると、

「そうですね。三ヶ月ほどいただきますでしょうか・・・」

ときた。驚くべき時間感覚である。

しかし、その間、二度も三度も、仮縫いをして、以来私の型紙は店にずっと保管されることになるのだ。したがって、次からは、手続きがぐっと簡単になるのである。

わが国の方式に比べると、なんとも手間がかかるけれども、客を決して十把一からげに扱わぬところに、やはり個人主義の伝統をみる。

そして、その伝統はじつに根が深いと、さまざまな場面で体験した。

外国で車が故障すると、ちょっと一苦勞である。パリで初めて、車を修理にだしたときは、いささか緊張した。なにしろ機械には弱い。日本ではちょっと調子が悪くなると、ガレージにもって行って「なんか変だから、みといて・・・」という、「おまかせ修理」の常連だったからだ。

どこが悪いのか、自分でも分からないのだから、ひとに説明のしようがない。

パリの修理屋におそろおそろ出掛けていくと、病院で渡してくれる初診問診表のようなものを、ほいと手渡してくれた。

要するに、直してほしいところを、自分でチェックせよというわけだ。これには弱った。なにしろ、病根がいずこにあるか、自分では分からないうえに、当たり前のことだが自動車の術語がフランス語で書いてある。

「えーと、ブレーキはなんだっけな」と、

字引をひきひき問診表を読むうちに、だんだん面倒くさくなった。

適当にしようと字引を放りだして、いろいろな箇所丸印を付けた。いわば、全面修理の格好である。

だが、考えてみると、修理代がばかばかしい。なんとかここに通ううちに、ガレージの親父と親しくなったので、あるとき、

「日本にはね、おまかせ修理というのがあって、実に便利だったな。フランス人だって、みんなが機械に強いわけじゃないのだから、日本式をやれば、結構流行るのじゃないかね……」
と、けしかけてみた。

親父はなるほどと、いったんうなずいたが、やはりその方式はフランスではうまくいかないだろうという。

「どうしてかな……あれは楽だったのだが……」

と、再度せまると、親父のいうに、

「そのやり方をフランスでやると、こちらが良かれと思っても、結局お客と喧嘩する結果になるだろう。頼みもしないものを修理したといって、代金を払うの、払わないのという論争になるし、たとえば、点火プラグを三本取り替えたとして、お客のなかには『どの三本だ。本当に新品と取り替えたのか』と、うるさく文句をつけるのも出てくるに違いない。よいとこなしだ」

という案配だ。

私もフランス人と多少付き合っていたから、親父の心配はよく分かる。しかし、それとは別に、親父のいった次の言葉が印象に残った。

「しかしね、お客の車のプラグが三本傷んでいるとするね。その場合、お客によっては、いま取り替えようと思っているかもしれないし、あるいは『この車は近く処分するから、もう交換する必要はない』と思っているかもしれない。お客の思惑はいろいろ違うはずだから、こっちが勝手にみんな取り替えてしまうのは如何なものかね」

私はこの考え方のなかに、重要な一つのポイントがあると思った。

われわれは人間を一からげにして、その最大公約数を想定する思考に慣れている。そして、その最大公約数に球を

投げると、まず成功すると考える。それは大量生産、大量消費の現代資本主義に適したやり方である。

しかし、個人主義の色合いの強いフランス人の場合、この日本式をやると、結局だれをも満足させないという結果になるであろう。最大公約数ではなく、個々人に絞らないといけないのだ。

効率という点では、日本式が勝っている。また、「おまかせ修理」の簡便さも有り難い。しかし、十把一からげの思考から生じてくる問題も、わが社会には山積している。

個々人の自己本位がないがしろにされるような社会に、望ましい未来が期待できるかどうか。効率や有効性が重視されすぎると、人間性の方がおろそかされるおそれは強い。八十五年まえの漱石先生の警世の言は、いまに重い響きを持っていると、私は思う。

ところで、去年の秋のフランスの大学進学資格試験バカロレアの哲学の問題は、次のようなものであった。

「ある理論の価値とは、その実際上の有効性によって測られるか」

「束の間のもの（エフェメール）に価値はあるか」

われわれも今やそれぞれの自己本位を確立して、この世の価値なるものに思考をはせる時かもしれない。二十一世紀も、もうすぐそこである。